

書評

ジェームズ・リーバンクス著（濱野大道訳）
『羊飼いの暮らし — イギリス湖水地方の四季 —』

加藤はるか

高低差のある丘陵地に、大小合わせて120の湖が点在する、イギリス北西部の湖水地方と言えば、今や世界的な観光地として知られている。しかし19世紀に景勝地として注目されるようになるまで、湖水地方はけして名の知れた地域ではなかった。1年中降水量が多く、夏でも気温は低く、水はけの悪い土壌の為、穀物生産に向かないこの地域では、中世以来、比較的豊富な牧草を生かした牛や羊の放牧が行われてきた。そして今でも、この地域には観光業の陰で、生産条件が不利な厳しい環境の下、昔ながらの暮らしを続ける羊飼いたちがいるのだが、その暮らしについてはほとんど知られていない。

本書は、600年以上湖水地方で羊飼いをしている家に生まれ、自らも羊飼いとして生きる著者とその家族の物語であり、数百年来変わらない羊飼いたちの暮らしぶりや湖水地方の風景も詳細に描かれている。本稿において、研究書ではない本書を取り上げるのは、中世後期のこの地域の生業を研究してきた私からすると、本書は単なる自伝本や家族史の枠に留まるものではなく、研究書や学術論文でも触れられてこなかったような、湖水地方独特の放牧の一端を、またこの地域の放牧において、中世後期から現在まで変わらない部分、あるいは変化してきた部分を明らかにしているからである。本稿では紙面の都合上、本書のこうした点についてのみ取り上げ、文芸書としての本書の魅力については他に譲ることとする。

本書の著者、ジェームズ・リーバンクスの家族が羊飼いを始めた600年以上前、すなわち中世後期の湖水地方の放牧の特徴は、秋から春までは谷の集落や農場で家畜を放牧し、夏になると入会地（本書では「コモン・ランド」と訳されている）である、柵などで囲われていないオープンな丘陵地（フェル）に家畜を移動させて放牧することであった。今やこのような「移牧」が行われている地域はヨーロッパでも珍しいが、本書から湖水地方では、今日でも中世とほぼ同じ形で、このような移牧が行われていることが分かる。そして本書における羊飼いの仕事の詳細な記述は、史料や先行研究からでは分からなかった、この地域の移牧というものの一端を浮き彫りにしている。

例えば、中世においても現在でも、オープンな状態の入会地で放牧を行う際、羊が他の入会地に入りこむことをどのように防いでいたのかという、この地域の放牧の根本にも関わるような疑問が湧いてくる。しかし史料からでは私にもこの点は良く分からなかった。この答えが、本書の最初の章のタイトルにもなっているヘフト（heft）である。羊は子羊の時から自分が属する丘陵地を本能的に把握し、他の丘陵地には移動しようとししない。この性質を使って、羊飼いたちがそれぞれの羊の群れを、特定の放牧地（丘陵地）に定住させることがヘフトである。著者は湖水地方に生まれ、ここを離れることなく生きる羊飼いとヘフトされた羊とを重ね合わせているが、このヘフトにより、オープンな状態の入会地で、羊が別の入会地に入り込むことなく放牧を行うことができるのであり、羊たちは夏の間、人間の世話なしで自由に暮らすことになる。従ってヘフトは、まさにこの地の放牧の要と言える。しかし先行研究では、ヘフト（先行研究ではheafとされている）については読み飛ばしそうなほど、さらっと触れられているに過ぎない¹⁾。このように現在にまで引き継がれる羊飼いたちの常識は、史料や先行研究からは得られない知見を与えてくれる。

次に、現在の湖水地方における放牧の方法は、前述のように、中世後期とほとんど変わらない。例えば中世後期のウィングミアでは、入会地で放牧できる家畜の頭数が、個々の農民ごとに、所有する土地の広さなどによって定められており、「家畜頭数制限 stint」と呼ばれていた²⁾。本書によれば現在も「スティント」なるものが存在しており、これを保有あるいは借りることで、入会地で一定頭数の羊を放牧できるようになるという。現在の「スティント」は売買・貸借できるとのことで、入会地の所有者であった領主と個々の農民との間で合意されていた中世後期の頃とは少し変化がみられるが、入会地において放牧できる頭数の制限を行う、“stint”という仕組みは今でも健在のようだ。

また本書によれば、現在も羊の移動には、大昔から使われてきた農場と丘陵地とをつなぐ小道（方言で「アウトギャング」と呼ばれる）が利用されている。中世後期から、入会地での放牧の権利（入会放牧権）を持っていることと、この小道の占有はペアとして捉えられており、ウィングミアでは丘陵地まで家畜を追い立てる経路（小道）が農民ごとに決められており、他人の小道を利用することが禁じられていた³⁾。これもまた中世後期から現在まで変わらないことの1つと言える。

こうした中世以来変わらない部分の一方で、中世とは大きく変化した部分も本書は明らかにしてくれる。もっとも大きな変化は羊飼いの専門化だろう。中世後期には農民たちは谷の集落に共同耕地や共同採草地を持ってお

り、これらにおいて共同で農作業を行う一方で牧畜を行っていた。現在は秋から春までの間、家畜は羊飼いが谷に個々に所有する牧草地などで放牧されるが、中世後期には収穫後の共同耕地や採草地で共同放牧され、春になると穀物や干し草用の牧草の生産の為、家畜はそこから締め出された。そこで再び収穫後の共同耕地などで放牧されるまでの間、丘陵地にある入会地での放牧が行われたのであり、当初移牧は農民共同の農作業とペアで成り立っているものだった⁴⁾。しかし現在は共同での農作業は行われておらず、羊飼いはあくまで牧羊に専念している。とはいえ昔ながらの共同作業がすべて姿を消したわけではなく、本書からは入会地での放牧中、毛刈りなどの為に入会権者合同で入会地の端に羊たちを駆り集めるというような共同作業が、今でも行われていることがわかる。

そしてもう1つ、牧羊の目的が大きく変化している。中世後期には牧羊を行う最大の目的は羊毛の生産であった。羊毛は中世においてイングランド最大の輸出物であり、14世紀前半を境に羊毛から毛織物輸出へと徐々に転換される中で、イングランド国内で原料の羊毛の調達から毛織物の生産まで行われるようになっていった。15世紀後半から16世紀にかけて、湖水地方も毛織物産業の拠点の一つとなり、その原料となる羊毛の需要は非常に高いものであった⁵⁾。しかし現在、羊毛は非常に安価で取引される為、羊毛を売っても利益が出ることはないという。そこで現在の羊飼いたちは、高地育ちの雌羊は繁殖力が強いことから、特に低地の農場向けに種羊を売ることと、夏の間丘陵の肥沃な牧草で育った雄の子羊を食肉用に売ることによって収入を得ている。しかし羊飼いだだけで生計を立てることは難しく、多くの羊飼いは何らかの別の仕事も持っているのが現実である。

このように、史料や先行研究からでは分からなかったこの地域の移牧の一端を、そして中世後期以来、大きく変化がないようにみられる湖水地方における牧羊の位置

づけや、農民の暮らし方が長い年月の中で変化をしていることを、本書は明らかにしてくれる。近年の人文科学研究では、現在の環境問題の解決や持続可能な社会への展望を探るといった目的もあり、「人間と環境との歴史的関わりあい」の研究（環境史）が活発になっている。そうした中で本書は、研究書ではないものの、人々が自然と共生しながらいかに生きてきたのか、そして現在もそれを引き継ぎつつ、どのように自然と共生しているのかを、非常に雄弁に語っており、環境史の観点からも高く評価することが出来るだろう。

湖水地方については、18世紀以降の環境保護活動などについて関心が集中しがちだが、自然と密接にあり続ける地域だからこそ、中世後期から現在までという長いスパンで、この地方の自然と人々の暮らしの関わりを考えることは、「持続可能な社会」を考える一助ともなるのではないだろうか。また移牧はどのような理由で専門化していったのか、そして牧羊の目的はどのような背景で変化し、それにより他にも羊飼いたちの暮らしに変化は起こらなかったのか。本書から見えてくるこうした問いは、湖水地方の自然と人々の暮らしの関わりの変遷を考える上でも、重要なものであると言えるだろう。

注

1. Winchester, Angus J. L., *The Harvest of the Hills: Rural Life in Northern England and Scottish Border, 1400-1700*, Edinburgh, 2000, p. 111.
2. 加藤はるか「中世後期イングランド北西高地における農村の暮らしーウィンダミア・マナを例にー」『お茶の水史学』58（2015年）、156頁。
3. Winchester, *The Harvest of the Hills*, p. 156.
4. 加藤はるか「中世後期イングランド北西高地における農村の暮らし」、154-155頁。
5. 加藤はるか「十五世紀イングランドにおける地域社会のあり方ー湖水地方・ケンダル諸侯領を例にー」『上智史学』54（2009年）、88-92頁。